

みちのく文学と風土の研究

(要旨)

林 丕雄

みちのく文学と風土の研究（要旨）

林 丕雄

第一章 序論

東北地方は「みちのく」（道の奥の意）と呼ばれ、都から遠く隔たり、しばしば中央政府に背き、文化果つる地とされ、凶作と飢饉に度々見舞われた。そして今なお古い習俗と信仰を残し、特色ある風土を持ち、独特の気質を備えた人々が生活を営んできた。本論文は、こうしたみちのくの風土と、その地に生を受け人格形成を果たした作家たちまたはそこで活動した作家との関係、その風土に根ざして生まれた文学との関係を明らかにしようとするものである。

第二章 みちのくの風土

風土という言葉は、漢語では水土及び自然環境を指すが、日本では人文的側面を多く含んでいる。みちのくは厳しい冬、短い夏という過酷な自然を備え、それによってみちのく人の辛抱強さと一時の利害によって動かされない律儀さが育まれる。また悲劇性を帯びた歴史的風土と、未開の辺地と見なされてきたことにかかわる劣等意識と反中央的反骨精神が受け継がれてきた。一方で、苛烈な自然環境と悲劇的な歴史風土で、ねばりづよく生きるなかに、明るい人生への期待が秘められているのではないか。

感受性豊かな文学者たちが、その人格形成に特に上記のような特色ある風土から影響を受け、その作品に風土性や地域的特性が表れてくるのも当然のことであろう。

第三章 風土と人間形成

第一節 太宰治

太宰治ほど、その人間形成の過程において、また作品の執筆において郷土が色濃く投影している作家はいない。

太宰治は、青森県北津軽郡金木村で金融業等を営み、大地主となり、衆議院議員、参議院議員を務めた津島源右衛門の第十子として生まれた。その幼少年期は肉親の愛に恵まれず、また成長するにつれて津島家の富と栄誉が近隣の百姓の搾取の上に成り立っていることを知るに及び、うしろめたさを覚えるようになる。こうしたなかで、東北人としての劣等意識と反骨精神が育まれた。自らを滅ぼすことによって純潔さを守ろうという考えが、3回の自殺未遂を引き起こし、無頼派文学者としての道をたどることとなった。その死に急ぎの意識は、みちのくの風土が生んだものである。

太宰の文体は呪術的であり、イタコの口寄せと共通しているように思われる。また、故郷を作品化した「津軽」は太宰の最高傑作であり、ことに乳母との再会の場面には、母胎に回帰した安らかさがある。こうして、みちのくの風土は、太宰文学の土壌ともなり、また破滅へも導いたのであった。

第二節 葛西善蔵

葛西善蔵は、一九八七（明治二十）年青森県弘前に生まれた。父には安定した職が無く、北海道、青森市、北津軽郡五所川原町など転々とした。善蔵は小学校卒業後、上京し苦学したが、十五歳の時に帰郷し、その後北海道に赴き、また上京、帰郷をくり返し、結婚してからも不安定な生活を続けた。

早稲田大学英文科の聴講生となり、一九一二（大正元）年、処女作「哀しき父」を発表した。そこには、劣等意識を基盤とした自虐的な精神構造が見られる。第二作「悪魔」にも同様で、芸術のためには何ものをも犠牲にするその精神は、暗さと執拗さをいう青森の方言「ジョッパリ」に根ざすものである。葛西のこうした文学至上主義は、貧困、酒、病気、一家離散という自己虐待の上に、私小説を成立させることとなった。特に注意すべきは、作品にも実生活にも顕著に見られる被害者意識で、それはみちのくの悲劇的歴史背景から来るものである。

烈しい個性の持ち主であった葛西も、老境に入ると望郷の思いを強め、「椎の若葉」「湖畔手記」「酔狂者の独白」に向かい、ふるさと津軽との自然との合一を願った、清澄な絶対境に到達している。

第三節 石坂洋次郎

津軽の風俗を描いて郷土性をそなえた作品、またユーモラスな青春文学に特色のある石坂洋次郎は、弘前の生んだ作家である。

慶應義塾大学で東洋文学を専攻していた頃、郷土出身の葛西善蔵に深く傾倒し、一九二三（大正十二）年に訪ねて以来、二人の交渉は善蔵の死まで続いた。石坂は、しかし、出会いの時から善蔵からののがれ去ろうと決意し、善蔵の人間性と文学と対決し、破滅的文学手法を明朗さに、闊達さに転換することを志した。その初期の風俗小説「壁画」には、津軽的な明るいエロチシズムを横溢させており、それは後の石坂文学に展開していくことになる。しかしまた、劣等感とひねくれを添えて作品を結ぶところは、津軽的な精神風土に基づくものである。

大学を卒業した石坂は、県立弘前高女、秋田県立横手高女の教師となり、その経験を生かして一九三三（昭和八）年に「若い人」を「三田文学」に連載した。この作品は一九三七年に改造社から刊行されてベストセラーとなり、これにより石坂は大衆作家としての地位を確立した。葛西善蔵への意識的反発と水上瀧太郎の薫染による新しい路線であった。しかし、修学旅行の生徒とこれを引率する教師の宮城前での言動や、軍港・横須賀や海軍士官の腰の短剣に関する侮蔑的な調子を帯びた会話等には、厳粛なものへの反発、反中央、体制への叛逆意識が認められ、それはみちのく共通の文化的、歴史的風土である。

石坂の人間形成に大きな役割を果たしたのは「ふるさとにて育まれた夢」（弘前市リンゴ公園内文学碑より）であり、石坂文学の底流をなしているのは津軽の風土である。

第四節 石川啄木

石川啄木は、一八八六（明治十九）年、岩手県南岩手郡玉山村の常光寺で生まれ、父が岩手郡渋民村の宝徳寺住職となったことに伴い、そこに移り、こうして啄木にとっては渋民村がふるさととなった。遅く生まれた一人息子として盲目的な愛情を受け、母が南部藩

士の娘であったため気位高く育てられ、小学校では村人から神童と呼ばれたことから、その病的なまでの自負心が、悲劇的一生を支配する結果となった。

岩手県には、生活の厳しさを教育で乗り越えようとする気風、薩長閥の明治政府から逆賊との汚名を受けたことに対して、これを学問ですすぐという気概があり、啄木の進学した盛岡中学にも、反骨精神と立志精神が横溢していた。

しかし、啄木は文学と恋愛に関心が深まるにつれて成績が低下し始め、試験の不正行為により二度の譴責処分を受けたこと、「明星」に短歌一首が掲載されたことを契機に、中学を退学して上京する。南部の風土が育てた反骨と自負と文学的「革命的精神」を内面に抱え、貧困と放浪の始まりであった。小説にも手を染めるが、評価は低かった。そのなかから、生活と密接に結びついた歌が作られるようになり、処女歌集「一握の砂」として結実する。

その憂悶懊悩と望郷の念をこめた歌は、明星派の模倣を脱し、啄木調を獲得する。土岐哀果のローマ字三行書きにヒントを得て、漢字仮名交じり三行書きを案出し、新調短歌により新生面を拓くこととなった。

第五節 宮沢賢治

宮沢賢治は、岩手県稗貫郡花巻町に生まれた。父政次郎は質屋と古着屋を営み、裕福であった。しかし、賢治は家業を嫌い、負い目を感じ、父とたびたび口論したという。盛岡中学時代には、石川啄木の「一握の砂」に影響を受け、短歌を作り、また舎監排斥運動を行ったりしたところには、反骨精神も認められる。

また、法華経と出会い、信仰を深めたが、浄土真宗への信仰篤かった父との対立は深まり、盛岡高等農林学校卒業後、国柱会に入り、上京して活動に参加した。その折に勧めを受けて法華文学の創作を始めた。妹とし子の病気を機に帰郷、稗貫農学校教諭となり、「心象スケッチ」の創作が本格化する。「春と修羅」に収められた作品は、みちのくの自然や風物を土壌として、法華経の時空観によって表現を得ている。

花巻農学校を退職した賢治は、農業指導者となり、独居自炊の自虐的禁欲的生活を始める。「野の師父」などの詩には、農業指導を法華経信仰と重ね合わせる思想が表白され、厳しい自然や風土には勝てない人間の宿命と、自然に順応しながらも貧しい農村を救済しようとする悲願が織り込まれている。

こうして、賢治の文学は、郷土愛に燃えて、貧しい岩手の現実に理想社会としてのイーハトーヴを実現することを目指すものであり、その意味でふるさとの風土に深く根ざしたものであった。

第六節 高村光太郎

高村光太郎は、東京に生まれ東京に育ち、二十代半ばの欧米留学生活を除き、東京を離れたことはなかったが、六十歳を過ぎて岩手県稗貫郡太田村の山中で七年の歳月を送った。本節はその理由を追尋しようとするものである。

著名な木彫家美術学校教授であった高村光雲を父に持ち、自らも東京美術学校の彫刻科に学んだ光太郎は、留学を経て孤独感と寂寥を深め、内部に批判精神を醸成していた。若い芸術家集団「パンの会」に加わるものの、焦燥と混迷に陥り、放埒に流れていた頃し

も、長沼知恵子と知り合い、一九一四（大正三）年に結婚する。これにより光太郎はデカダンスから脱し、知恵子が福島県二本松町の出身であったことにより、みちのくへの接近がはじまった。

さらに、光太郎は、宮沢賢治の死後「春と修羅」に接してその価値に気づき、賢治との精神的交流は深まり、賢治の思想に影響されるようになった。また詩作品にも影響が認められる。「智恵子抄」の知恵子の死をうたった「レモン哀歌」は「春と修羅」の妹の死をうたう「永訣の朝」に影響を受け、「あなたはだんだんきれいになる」は「松の針」に影響を受けて作られたものである。

光太郎は、戦時中花巻の宮沢家に疎開し、そこが戦災に遇って一九四五（昭和二十）年より、花巻郊外の山小屋に移る。みちのくの風土への親しみと、宮沢賢治との精神的交流の深まりによるとともに、戦時中に多くの戦争詩を作ったことへの反省としての「自己流謫」であった。

第四章 みちのく文学の特質

みちのくに生を受け、あるいはみちのくの人や風土に影響されて人間形成を果たした文学者は、いずれも反骨精神を抱き、被害者意識にとらわれ、自虐的な性格を共有している。太宰治、葛西善蔵、石坂洋次郎、石川啄木、宮沢賢治、高村光太郎の文学に、被害者意識と自虐性を帯びた人物が登場するのも当然のことといわねばならない。

太宰治の「人間失格」の主人公大庭葉蔵の姿と表情に関して否定的な言葉を連ねた描写。葛西善蔵の「蠢く者」「酔狂者の独白」における作家の自堕落な生活、家庭内のいさかいに関する描写。石坂洋次郎の「辛抱づよく生きたS氏の肖像」「水で書かれた物語」における妻を他人に奪われる主人公の姿。石川啄木の短歌に詠まれた貧困生活。宮沢賢治の「小作調停官」にうたわれた自然の暴威に翻弄される農民の惨状。高村光太郎の「人体飢餓」にうたわれた戦後の山中生活。これらには、作家・詩人の被害者意識あるいは自虐性が顕著に見られる。

被害者たちは、「ジョッパリ」精神を貫こうとするものの、自然の暴威にひしがれて反骨や反逆を生み、敗北がうち続くと、それがひねくれに変わる。太宰の「善蔵を思う」には典型的にひねくれ根性が盛り込まれている。

しかし、みちのくの人と風土を愛する文学者たちは、郷土に光明を切望する。みちのくの文学者に共有されるこうした郷土愛を「祈りの文学」と名付けたい。

「椎の若葉に光りあれ。（中略）親愛なる椎の若葉よ、君の光りの幾部分かを僕に恵め」という真摯な思いをこめた葛西善蔵の「椎の若葉」はその最高傑作である。そのほか、石坂洋次郎、石川啄木、宮沢賢治、高村光太郎の作品にも同じく、光明を求め、ふるさとを理想社会とすることを願望し、また世界の平和を希求する思いがうたいこまれ、そのような意味で「祈りの文学」と評することができる。

【付記】本論文は、一九八二年三月に林丕雄著『みちのく文学と風土の研究』（A4判、総頁数160頁）として鷺鷥文物供應公司（台北市）より出版されたものである。